

きつねのあしおと

広島県広島市 中村 沙奈

半世紀以上も生きていれば、思い出すと胸が痛くなるようなことのひとつくらい誰にでもあるだろう。わたしにとってそれは十歳のあの秋だ。

五年生になった年の六月だった。そろばん塾の帰り道、鶴峯八幡宮の脇を通りかかったとき、誰かが秘密めかして言った。

「明日、転校生が来るらしいよ。広島の子だって」

それはちよっとした事件だった。古い集落に住むわたしたちにとって転校生は珍しかった。というのもそのころはまだ光風台団地も造成中で、他所からきた人自体が珍しかったからだ。梅雨空のうつつらしい毎日に飽き飽きしていたわたしたちは、どんな子だろう？男子？女子？ぬかるんだ道をベタベタ歩きながらあれこれ話した。

そして美帆子が来た。

自己紹介のあと席についた彼女を見ると、真っ赤になった耳に気がついた。振り分けて結んだ髪の毛飾りがわたしのと似ていて、わけもなく嬉しくなり、授業が始まってもし上の空だった。

休憩時間になると、みんな興味深々で見ているくせに、遠巻き

に取り巻いているだけでなにを話していいかわからず、誰かが口を開くのをずっと待っていた。

そんなとき、クラスでいちばんのお調子者の啓太が、沈黙に耐えきれなかったのか唐突に人気コメディアンモノマネを始め、それを見た美帆子が吹き出した。

それがきっかけだった。

話してみると共通の話題はいくらでもあった。みな同じテレビ番組を見て、誰もが知っているアイドルがいて、女の子たちはみんなそのアイドルの振りまねで踊れて、誰かが買った漫画を回し読みしてあれこれ話す、そんな時代だったのだ。

そのうちみんなの興奮も落ち着いてきて、夏休みが始まるころにはすっかりクラスの一員になっていた。

美帆子は小柄だったが運動神経がよく、外遊びのときはいつも誰かに誘われていて、業間休みや放課後にはたいいてい校庭にいた。鬼ごっこ、ケイドロ。足の速い美帆子は取り合いになった。

「走るときはね、腕を速く振るんだよ。そしたら足も速く動くから。おねえちゃんがやってみせるから、見てて」

そんなふうに優しく教えるので、下級生にも人気があった。

夏の終わりだった。刺すような日差しが少しだけ優しくなった。遠くに見える真新しい光風台駅が白く光っていた。遊び疲れて田んぼの土手に座って、みんなで風にあたりながら日焼けした腕をくらべっこしていると、とつぜん美帆子が言った。

「波の音がするよ」

「え？」

「ほら、目をつむってみて」

言われるままに目を閉じた。風がサツと稲をなぶる音がするだけで、わたしには波の音は聞こえなかった。薄目をあけて隣に座る美帆子を見ると、微笑みながら息を大きく吸いこみ「潮の匂いがある」とつぶやいた。

まさか。わたしは鼻を鳴らして匂いを嗅いだ。泥と夏草の匂いでむせるようだった。

どう考えても田んぼだよ、とそこにいたみなが口々に言った。

「そうだけど、似てるんだよ。広島の人に」美帆子が口を失らせ、反論した。

田んぼの上を滑ってくる風が、普通よりも涼しいのは海もいっしょだとか、光をはじく稲穂の動きが瀬戸内の波に似ているとか、遠くの白い光風台駅が灯台みたいだとか、あれこれ聞いているうちにそうかもしれないとみんなが思い始めたとき、和美が立ち上がって言った。

「魚になろうよ」

「へ？」

「ここが海なら、わたしたち魚じゃない？」

「じゃあ、トビウオ」

美帆子が真っ先にかけて出した。緑の波を抜けて、笑いながら、真っ直ぐに。

なにもなくてもただ走り回っているだけで楽しい、そう思える年頃だった。わたしたちもあとを追って走りだした。乾いた足音

と笑い声が空に響く。美帆子の髪飾りの赤い玉が揺れていた。

目の前に鶴峯八幡宮の杜が近づいてくる。誰も追いつけない。美帆子とその杜のなかに吸い込まれていくのを、わたしは弾む息で見送った。

美帆子が小湊鉄道沿いに広がる田んぼを海と言ったのはそれが最初ではなかった。

広島でこんなに平らに空まで広がっているものは海ぐらいだよ、とよく言った。

わたしが生まれたころには、もう市原市の海は埋め立てられ工業地帯となっていた。そのせいで当時のわたしにとって海は馴染みのない場所だった。目の前の緑はどこをどう見ても田んぼで、美帆子がどうしてそんなにもそこに海を見るのかよくわからなかったが、その違う感覚が面白かった。

「このへんの田んぼってすごくきれい。そう思わない？」

二期が始まって学校からの帰り道、美帆子は緑の先のその先を指さして振り向いた。正直そんなふうには思ったことはなかったが、ほめられたのが嬉しくて「秋にはもつときれいになるんだよ。稲穂が黄色くなって、ずっとずっと向こうまで。すごいよ」と負けないくらい手を伸ばした。

「それに秋には鶴峯八幡宮の神楽もあるしね」和美が続けた。

「神楽？」

美帆子が不意をつかれたような顔で目を見開いた。

「うそ、こっちにもあるんだ」

「え？広島もあるんだ」

三人で顔を見合わせて笑い、一緒に行こうと約束をした。

「今年の十五日は土曜日だから、ちょうどいいよ」

鶴峯八幡宮の秋季例大祭は当時は十月十五日と決まっていた、平日であれば会社勤めの大人たちは仕事を休んで参加していた。それが当たり前ののかな時代だった。常設の神楽殿はまだなく、前の日に社殿の東角に仮設の小さな神楽殿を建て、十二座神楽はそこで舞った。

幟が立ち、神楽殿の準備が始まり、次第に近づいてくる祭りの気配になんとなく浮き立ちながらその日を迎えた。

祭りの日、学校から走って帰ったわたしは急いでお昼を食べた。身支度をし、お小遣いと大判のハンカチの入ったポシェットを確認するように軽くたいた。

「もう行くの？」

母が呆れたように言った。

「約束あるから。美帆子ちゃんたちと」

「美帆子ちゃん？ああ」と母が頷いた。

「あの転校生の子？仲良くしてあげなさいね」

「もうしてるよ」

振り向きもせず飛び出していったわたしは、ただただ目の前にあるだろう楽しい出来事のことだけを考えていた。

約束の鳥居の前にはまだ誰も来ていなかった。屋台から漂う美

味しそうな匂いに、昼ごはんを食べたばかりだというのに、もう睡がわいてくる。

そわそわと鳥居と神橋の間を行ったり来たり、下の水路をのぞいたり、落ち着きなく待っているうちに、風に乗って聞こえてくるお囃子が変わった。「猿田彦の舞」が終わって「副巫女の舞」がはじまったんだと思った。

次は「稲荷様の舞」だ。

わたしはこの舞が一番好きだった。狐の面をつけ白い衣装をまとった三人の子どもが、稲荷様の周りをスキップに似た足取りで、ふわりふわり行き来する。ととん、ととんという軽い足音。面のせいか、足音のせいか、まるで本物の狐の精のように思えた。自分もいつかあんなふうになるんだと思っていたので、女の子は狐になれないと知ったときにはがっかりした。

一番好きな舞だから、ぜったい見てもらいたい。そのときのわたしは単純に考えていた。美帆子と見るともっと素敵に見えるに違いない。ちょうど変わり映えのしない風景が、なにか特別なものなるように。そう思って顔を上げると、鳥居の向こうから和美と美帆子が手をふっていた。

土曜とあって、境内はいつもの年より混んでいた。見知った大人たちが、せわしなく行き来している。砂利を踏む音。うつすら漂うお酒の匂い。屋台の煙。美帆子が物珍しそうにキョロキョロする。寄り道しようとするのを引っ張りながら「ほら見て」と指差した。

社殿に向かつて右前に仮設の神楽殿があった。左右の柱にはサカキがくくられて、上には「千葉原無形文化財」と書かれた紫の幕としめ縄が張りめぐらされている。

真ん中に座っているのは、白く長い髭の稲荷様。ちょうど「稲荷様の舞」が始まるところだった。

静かに座る稲荷様は優しげな顔をしている。笛の音に導かれ、奥の簾がくるくると巻き上がり、三匹の白狐が現れた。扇子を揺らす稲荷様の前を行ったり来たりする。柔らかな足音。ゆらゆら揺れる手。鼓の音が走り、篠笛はゆらぐ。わたしは無意識のうちにお囃子に合わせて体を揺らしていた。小さいころよく踊りのまねをして祖母に笑われていたのを思い出す。

どうして巫女じゃなくて狐がいいんだよ、女の子なのに。

美帆子はぼかんとした顔で舞台を見ていた。つまらないのかとわたしは心配になった。まだ始まったばかりなのだ。だが「月日の巫女の舞」「恵比寿様の舞」と演目が進んでも、美帆子はじつと舞台を見つめ続けた。なにかが始まるのを待っているような、そんな期待のこもった顔をしている。面白くないわけでないらしいと思つてわたしはほっとした。

なにか言つてくれないかな。

わたしがどきどきしながらそう思っていると、退屈そうな和美に肩をたたかれた。

「鳥居のこの屋台行つてみようよ。八幡様までに戻つてくればいいじゃない」

無理もなかった。十二座神楽はその名の通り十二の演目から

成つていて、通しで見ればたつぷり半日はかかる。「恵比寿様の舞」が終わつても「三韓の舞」「八幡様の舞」「老人の舞」「浦島の舞」「湯立ての舞」「太刀の巫女の舞」「山の神の舞」とまだ七つも演目が残っているのだ。

実のところ、子どもにとつて楽しみなのは八幡様の鬼と山の神の餅まきで、じゃあとりあえずなにか食べて戻つてこようと話が決まり、わたしたちは後になり先になり駆け出していた。

境内の方でどつと声が聞こえた。急いで戻ってきたときには鬼はもう本殿の屋根にいた。「八幡様の舞」で鬼が屋根から現れると会場はいっそう盛りあがる。鬼は屋根の上でひよこひよこと思わせぶりに姿を現しては消えていく。いつ降りるか、今か今かと思つて見上げると、気づいたときにはもう、するすると器用に縄を伝つて降りていた。

鬼が恐ろしげな動作で境内を飛び歩くと、大人たちは抱き上げた我が子を孫を、鬼のそばに連れて行こうと立ち上がる。鬼に触れられると病気をしないと囁かれていたからだ。

驚いて泣きだす子どもを見て「かわいいねえ」と目を細める大人たち。

小学生ともなればもう事情はわかっている。そんなわたしたちは面白がつて鬼を遠巻きにしながら、ちよつとしたスリルを求めてちよつつかいを出しては逃げまどう。棒立ちでとり残された美帆子は鬼に腕を掴まれ悲鳴をあげた。

「なにこれ？」

うわずった声がおかしくて、わたしたちは笑った。「やだな、わたしたちもう五年生だよ。あかちゃんじゃないんだから」

そう言って美帆子の肩に手をかけようとして、振り払われて睨まれた。

鬼は悲鳴と笑い声をつれて、飄々と練り歩き、やがて八幡様の待つ舞台へと戻っていった。

そのあと美帆子がなにを言ったのか、今ではほとんど思い出せない。ただ気づいたときには売り言葉に買い言葉で言い争いになっていった。「こんなの神楽と違う」そう言われたとき、わたしは自分を抑えきれずに美帆子の肩を突いた。

「そんなに広島のがいいなら、帰ればいいのに」

美帆子の動きがとまった。息をのむのがわかった。

なにを言い返されるかと身構えていたわたしを見もせず、美帆子は「帰る」と背を向けた。

そのまま乱暴に人に突き当たり、驚き避ける人の横をすり抜け走り去った。

わたしたちは慌てて追いかけて、境内を抜けて農道に出た。

ずっと遠く、光風台駅に向かってまっすぐに走る影が見えた。

「ほんとに帰る気なのか」

「まさか」

わたしたちは子どもだった。きつとそんなわけないよね、と勝手に思った。

息が上がり、足が止まる。夕陽に照らされて黄金色をした稲穂がざわざわと揺れていた。

遠ざかる影が光に消える。もう追いつけそうもなかった。列車の音が近づいていた。

今でもときどき夢にみる。

耳元で風がごうごうと鳴っていた。稲穂が波の音をたて、美帆子はバタバタと乾いた足音をたてながら遠ざかる。わたしはひとり懸命になにかを叫びながら追いかけている。走っても走っても、ちつとも近づかない。「腕を速く振るんだよ」言われて必死で腕を振る。列車の音。小さくなる影。空が赤い。もどかしく足を動かすのに空回りしているようだ。もつとこの体が軽ければ、追いついて止められたのに。胸がしめつけられて息が止まる。不意にあたりが暗くなり、足元にあったはずの稲穂がずっと上の方で揺れているのに気がつく。足音が軽い。そう感じたときにはわたしは白い狐になっていて、澄んだ笛の音に乗って駆けめぐる。これならどこまででも行ける、きつと美帆子を止められる、喜びに震えながら、走って、走って、走って、背中が見えた。ああ今度は間に合ったと安堵して、ごめんね、戻ろうよ、いっしょにお餅を拾わなきゃと美帆子に言う。笑う美帆子に抱き上げられ、そこで目が覚め夢は消える。

列車に乗った美帆子は五井駅で保護されたという。

月曜日、美帆子は学校に来なかった。先生はただお休みとだけ言っただけで出席簿を閉じた。ちらりとこちらを見たような気がしてうつむいた。

一時間目が始まって、ざわつく教室はゆつくりと静かになっていった。わたしはぼっかり空いた前の席を見ながら、どうしたらいいのかわからず途方に暮れていた。
謝るしかない。

そう思って美帆子の家に向かった。いっしょに行つてあげるといふ和美に首を振り、ゆるい坂道をひとりどほと歩いていると、それらしき青い屋根の家が見えた。庭先で洗濯物が揺れている。カラカラと音を立てて玄関の戸が開き人影が出てきた。いつだったか参観日で見た美帆子の祖母だった。ふりしぼった勇氣は歩いていくうちに尽きたようで、とっさに身を隠した。

広島に帰ればいい。

あんなこと言つたから。美帆子はわたしのせいだつて話したんだらうか。美帆子の祖母はどう思つただらう。怒られるかとも思うとどうしても動けなかつた。

「それで美帆子ちゃんどうなの」

「なあんも。ただ列車に乗つてみたかつただけつて」

「やっぱし母親が恋しいんだらうよ」

美帆子の祖母は誰かと話していた。

「すっかりこつちになじんだと思つていたんだけどね」

「仕事、まだ見つからない？」

「ちゃんとした仕事があればねえ。弟もあつちに取られたりしなかつただらうに」

切れ切れに聞こえてくる会話から、美帆子の事情が透けてみえた。両親の離婚、母方の祖父母に預けられてここに住むようになって

たこと……。

聞いているうちによけいに出ていけなくなつた。取り返しつかないことをした、とぼんやりと思つた。わたしはただ自分の足を這い回る蟻を眼で追つていた。

一週間休んで美帆子は学校に戻つてきた。

「家出大失敗。むちゃくちゃ怒られた」

おどけてそう言つたと笑つた。

たぶんそれは強がりだつたのだらう。なんでもないように振る舞い続けた。わたしがとつくに謝つていふと思ひ込んでいる和美は、屈託なくわたしたちを遊びに誘ひ、なんとなく前のままのような、でもどこかよそよそしい、そんなつきあひが続いていた。このままずっとこうなのかなと思つていた矢先だつた。

宙ぶらりんのまま年が明け、鶴峯八幡宮に家族で初詣に行つたときのことだつた。

やはり家族で初詣に来ていた美帆子とばつたり出会つた。

「あ」

どちらともなく声が出た。

大人たちは互いに挨拶を交わし、女の人がつこり笑つと「仲良くしてくれてありがとね」と言つた。

美帆子のお母さんだつた。

わたしはぼやけた笑顔を作ると目を伏せた。

「なに恥ずかしがつて」

母が笑つてわたしの頭をくしゃつとなで「こんな子だけど、こ

れからも仲良くしてやってね」と美帆子に言った。美帆子はペコリと頭を下げ、顔を上げて上目遣いに自分の母親を見た。

「それがねえ、残念だけど二月には転校することになって」

「まあ」

「わたしの仕事が東京だから」

頭の上で交わされる大人たちの会話が耳を素通りしていく。

家に帰ると母が突然お小遣いをくれて「お店が開いたら、これदनにかお饒別を買いなさい」と言った。

「おせんべつ?」

「お別れのプレゼントよ」

手にしたお金握りしめると、突然なにかがこみあげてきて、ぎゅっと目を閉じた。

今日こそ言おう、今日こそと思ううちに日が過ぎた。最後の日の学校からの帰り道、ひとりで帰っていく美帆子のあとを追いかけた。今度は間に合った、と思った。

足を止めた美帆子が振り向くと、寄せ書きや饒別の入った紙袋がカサカサ音をたてた。

「あときは、ごめんね」

やっとの思いでそう言うと、美帆子はふっと笑った。

「いいよ、もう。別に怒ってないし」

美帆子は遠く列車の止まった光風台駅に目をやった。

「あのとさねえ、始めは頭にきてただけけど、列車みて、あ、おこづかいある、帰れるんじゃないかって思ったら、乗ってた」

列車がゆっくりと走り出し、美帆子はそれを目で追った。

「お金、ちっとも足りないのにな」

「お年玉とか貯めたら帰れるんじゃない?」

美帆子は眉をしかめた。まるで年下の子に諭すように言った。

「どうかな。だつてすごく遠いし。それに子どもだけで乗ってたら、また捕まっちゃうと思う」

「……そうだね」

「あーあ、早く本当の大人になりたいよ」

わたしたちは子どもだった。大人になればきつと、もつと自由になれる、どこにでも行ける、そう思っていた。

秋晴れの良い天気だった。高台にある我が家からは、瀬戸内海の島々がいつもより遠くまで見えた。

庭で草むしりをしてると声をかけられた。振り向くと隣りの奥さんが回覧板を振っている。わたしは顎に下げていたマスクを付け直し、フェンス越しに受け取った。

そういえば、この人どんな顔だったっけ。もう二十年近く隣人として過ごしているのに、たった二年でマスクとセットの顔しか思い浮かばない。向こうもそう思っているのか、じつとわたしの顔をみて小首を傾げている。

思わず口が笑った。

「あなた東京からだっけ?」

「千葉なんですよ」そう言って、たまらずつけ加える。「もう二

年も帰れなくて」

「それは……大変ね」

マスク越しの会話は聞きとりにくく長続きしない。互いに軽く会釈すると家に帰った。

回覧板のお知らせをめぐりながらリビングに入った。学校新聞、防犯のお知らせ……。

「あ、今年も中止？」

思わず出た声に、ソファーにねそべって野球を見ていた夫が顔を上げた。

「神楽、今年も中止だって」

そうか、と夫は小さくうなずいて、画面に視線を戻した。

いつもの日曜日。いつもの野球観戦。かわりばえのない午後。いいよね、あなたはここにいられて。少しだけ夫を憎らしく思う。

夫の故郷の広島に越してきた年の秋、小さかった子どもたちを連れて初めて広島の子供の神楽を見た。

それは冷え冷えとした夜だった。明かりに照らされた広い舞台に目をやると、凝った刺繍で重そうな衣装をまとった登場人物が、太刀を使って派手に立ち回り、早変わりには、スモーク……演目の最後には人の背の高さまでトグロを巻く大蛇まで現れて、わたしはあっけにとられて笑いそうになった。もうこれはお芝居だ、スベクタクルなエンタメだ、そう思った。

初めて見る神楽に興奮してはしゃいだ声をあげ、刀を合わせるマネをしてはくるくる回る幼い子どもたちを見ながら、ああ、これは確かに違ったね、と心のなかであのときの美帆子に話しかけ

る。あなたがずっと待っていたものはとうとう現れなかったんだね。

広島に帰ればいい。軽くそう口に出してしまえたあのときのわたしは、なんと無邪気で傲慢だったのか。

わたしはため息をついて回覧板を閉じた。

不思議なものだ。もう広島での生活の方がずっと長くなり、確かにこの地に根を張ったといえるのに、神楽と聞いてわたしが思うのは、やはりあの稲荷様と白い狐たち、オカメやヒヨットコ、釣り竿を持った恵比寿様や神出鬼没の鬼なのだ。

帰れないと思えばよけいに恋しい。

あちらはどうしているだろう。

いまもあの足音は響いているのだろうか。耳をすましてみても、ここでは聞こえるわけもない……。

カンツと音を立てて画面の中で白球が弧を描いていった。

コロナのせいで応援の鳴り物のない試合中継は、どことなく気の抜けたサイダーのようで、気がつくとも夫はとうとうと舟を漕いでいる。

ふと、夫も帰りたいのじゃないかしらと思う。

テレビの歓声にあわせて「なにをやっとるんじゃ」「ようやった」と大騒ぎする、そんな午後には。

いまは誰もが帰れない。

わたしは毛布を手にとると、そっと夫の背中にかけた。